

開かれた農業経営を 目指す



今後、変化を続ける農政環境下で、十勝の農業にも創意工夫が求められています。ここでは、十勝で農業を営み、独自の活動を展開する方々にお話を伺っています。今回は、観光・農作業体験などの受け入れにも積極的な新得町の「ひら農園」を訪ね、役職上参加した多くの会合から見えた十勝の農業実態や、農園で取り組む「食育」へつながる活動について語っていただきます。

豊かな土と 低農薬が育む 「おいしい野菜」

「こちらで作られるものは何であらう。土づくりに力を入れていこう」とお聞きしましたが、平／ここでは小麦、豆類、ビート、馬鈴しよに、スイートコーン、ニンジンとサヤインゲンなどの野菜類を作付けて、四、五年の輪作体系を取っています。だいたい、小麦、ビート、馬鈴しが各七、八ヘクタールで、全耕作面積は三十四ヘクタールです。土づくりでは、堆肥を還元しているのが特徴です。堆肥は、肉牛農家のパルク堆肥と、敷き料となる小麦カラと交換した酪農家の堆肥を混ぜて畑に使い、緑肥も植えています。そうした有機質肥料の使い



「ひら農園では、観光や農作業体験など、教育農園事業を行っています。」

農作業体験を 積極的に受け入れ

平／そうですね。就農当時は堆肥の還元など土づくりに、時間と労力がかかるわりにはその効果が実感できず、葉面散布材など安易な方法をとる農家が少なからずいました。しかし、その土で育つ野菜は満足できるものではないですね。平年作以上の雨害、干ばつに弱い。平年作以上の、しかも美味しいものを作ろうと思えば、土づくりに手を抜くことは出来ません。土が元氣なまれば、農薬散布も少なく済みます。また、化学肥料は比較的高いコストで、その土には何が不足しているか(過剰なのかを分析し、手回ひまを惜しむに、不足するリン酸ならリン酸チッ素ならチッ素だけというように)単肥配合も行っていません。管内農家でも、手間を惜しまない人なら一般的に実践されている施肥方法です。これにより、肥料代にかかるコストを押さえるようにしています。

平／収穫体験をメインに行っています。今年は、ちよつとしたエピソードがあつて、ホームページを開くことができませんでした。実は七月の小麦の刈り取りが開始する直前にアキノス腫を切っていました。半月ほど入院していました。退院後、家族もみんな忙しい時期なので、自分が「専業主夫」として料理を担当することになったんです。農家の主婦の大変さが実感できて、本当に貴重な「人生の夏休み」となりまして。その頃、ショートワーキングステイでこちらへ来たという本州の会社員がいて、受け入れました。自分の作る料理を何でもおいしい、おいしいと言つて食べてくれるので、嬉しかったですね。そして、その男性が帰る際に「ホームページを立ち上げたくて、病院で参考書を読んだけど、よくわからなくて相談したら、一ほくでよければお手伝いしましょうか」と。泊延ばして手伝つてくれたんです。助かりました。おかげでこの夏自分の農園のホームページを作ることができました。

平／そうですね。やはり、おいしいものを家族に提供したい、笑顔を引き出したという思いから、テレビやインターネットでレシピを研究するなど、あれこれ工夫しました。野菜が豊富な夏の時期だったこと、思っていましたね。野菜は料理しなないと、なかなかおいしさが消費者に届かないので、料理することがとても大切だと気づきました。教育ボランティアの受け入れにも登録しているため、総合学習などの小学生、修学旅行の高校生などが農場にやってきました。自分で手をかけ、収穫し、料理したものを食べる。そのおいしさや収穫の喜びが記憶に残るは素晴らしいことだと思います。

本州とは違う 輪作と原料型農業

平／役職上、全国を視察したり、会合に参加したりという経験が多いようですが、ほかの地域から十勝農業は、どんなふうに見られているのでしょうか。

平／役職をいただいていることから、東京や札幌など、多くの会合に参加する機会があります。「一番強く感じるのは、十勝の輪作は東京では理解されない、ということですね。本州では稲作が主流です。転作で小麦を作ることは理解できるものの、十勝では本作小麦であることに驚かれます。国産小麦の五分の三は、メイドイン北海道です。そのうち約四十%が十勝で作られる「ホクシン」なのです。つまり、国産小麦の四分の一は十勝産。これは、本作小麦以外の何もありません」と説明されています。



生産責任を負い ながら情報発信を

平／品目横断的経営安定対策も踏まえて、十勝の農業はどんな方向性を目指せばよいとお考えですか？

平／農家戸数の減少を見ると、強力な政策を打ち出さないと、十勝農業も持たないところまで来ていってしまうと感じます。府県と違い、専業農家が多く、大型農業が主流の地域です。さらに規模拡大の結果、離農農家が、増え、学校がなくなり、「農業は生きがいが、農村は枯れる」という事態も十分に考えられます。これからの農業は、地域振興対策と両輪で考える必要があると思います。いずれにしても品目横断的経営安定対策だけで何とかなる時代ではありません。生産責任として、思いながらく、環境に配慮した農業を実践し、いままの能力でやれること、例えばブライベイトブランドを作つて自分で売っていく努力も、今後農業の担い手には必要になってくるでしょう。十勝だからこそ発信できるものがあると思います。

平／そうですね。就農当時は堆肥の還元など土づくりに、時間と労力がかかるわりにはその効果が実感できず、葉面散布材など安易な方法をとる農家が少なからずいました。しかし、その土で育つ野菜は満足できるものではないですね。平年作以上の雨害、干ばつに弱い。平年作以上の、しかも美味しいものを作ろうと思えば、土づくりに手を抜くことは出来ません。土が元氣なまれば、農薬散布も少なく済みます。また、化学肥料は比較的高いコストで、その土には何が不足しているか(過剰なのかを分析し、手回ひまを惜しむに、不足するリン酸ならリン酸チッ素ならチッ素だけというように)単肥配合も行っていません。管内農家でも、手間を惜しまない人なら一般的に実践されている施肥方法です。これにより、肥料代にかかるコストを押さえるようにしています。

平／野菜ができるまで、そして口に入るまでのプロセスを身体で知ることはとても大事なことです。まさに、食育の一端を担っています。平／退院後に地元新得で行われた二十世紀の食卓を考える会(現地研究会)で、ミニ講演を担当する機会がありました。そこでは、食関連の企業やバイヤーなどが集まり、消費者の中食、外食が増えるなか、「家庭食」の見直しをテーマに勉強しています。今回の講演では、「主夫としての視点も役立ちました。生産者がいかに安心・安全なものを作つて、それを売って生かす料理法がなければ、食卓まで届かない。消費者へ届けるために、どんな形で商品を提供していくかが重要ですね。これからますます、家庭食の大切さを皆さんで考えることが必要だと感じました。」



平 和男(ひら・かずお)氏(42歳)
帯広農業高校卒業後、本別町の農業大学校へ。1986年、「ひら農園」を継ぐ。1992年、北海道農業士認定。95年から体験農園開始。98年にJA新得青年部長、2001年にJA十勝地区青年部協議会会長理事、2002年にJA北海道青年協議会副会長(畑作担当)、2004年に同会会長、2005年には全国農協青年部組織協議会副会長を務める。現在、JA北海道青年協議会参与、ホームページアドレスは、<http://hirafarm.web.fc2.com/>